

今帰仁村文化財調査報告書第5集

史跡 今帰仁城跡

第1次発掘調査概報

1981年3月

沖縄県今帰仁村教育委員会

今帰仁城跡第1次発掘調査概報

はじめに

今帰仁城跡環境整備事業が今年度からスタートし、その一環として発掘調査を実施した。今年度は9月8日から12月22日まで、城内東側の志慶真門内^{シジマジョウ}と旧道の発掘を実施した。その成果の概略を述べる。

位置と環境

史跡今帰仁城跡は、沖縄県今帰仁村今泊ハント原に位置し、史跡の指定面積が78,868.5㎡である。海拔90～100mの古成期石灰岩上に形成された沖縄屈指の名城である。城内は8つ程に区画され、郭状を呈している。その郭状の一つが今回発掘した志慶真門で、面積が約2,000㎡ある。

調査の経過

9月8日から一週間は志慶真門第2テラスの抜根作業と表土層の発掘。9月16日からは旧道と真慶真門第2クラスの発掘を平行して実施する。

10月4日に旧道の発掘は完了し、6日からは志慶真門だけの発掘を行なう。10月15日に志慶真門第2テラスの発掘を完了し、16日から第3テラスの発掘にはいる。12月22日に第2、第3テラスの埋戻しを行なって55年度の発掘調査は完了した。

遺 構

(1) 旧 道

平郎門（城門）から城内へ約 50 m 入ったところから右へ折れると「旧道」と呼ばれているところがあり、今回そこを発掘したところ、幅 1 ～ 3 m、長さ約 54 m の石畳道が検出された。この石畳道は平郎門と本丸を結ぶ道路であり、築城時の城内の主要道路であったと考えられる。平郎門から城内へ入ってすぐの 50 m は 1958 年に造られた七五三階段の参詣道の下にもぐり込んでおり、参詣道の下を発掘すると計 104 m の石畳道が検出されることになる。

(2) 志慶真門内の宅地造成（「武士」の屋敷跡）

志慶真門内は 4 段のテラスになっているが、発掘の結果、自然のテラスではなく、宅地造成によって 4 段のテラスにしたことが確認できた。これらのテラスを南（高い所）から第 1、第 2、第 3、第 4 テラスと呼ぶことにした。今回は第 2、第 3 テラスを発掘し、その結果、これらのテラスが「武士」の屋敷跡であることが確認できた。それは、刀の破片、短刀、鉄鏃、切羽、袴などの武具類が検出されたことで、武士が住んでいたことが理解できる。しかもそれは、城主側近の「上級武士」と考えられる。

(3) 建物跡

第 2 テラスで約 4.2 m × 5.6 m の長方形の柱穴群が検出された。この建物は 17 本の柱を周囲に廻らし、中に炉跡を持っている約 23 m² の掘立柱の建物（方言でアナヤー）であったと思われる。第 3 テラスでは 2 つの建物がほぼ同時期に建っていたと考えられる。2 つとも炉跡のある掘立柱の建物で、第 2 テラスの建物とほぼ同規模であったと思われる。なお、最下部に第 3、第 4 テラスにまたがる建物があつたようであり、これは最も古い時期の建物跡と考えられる。

出 土 遺 物

(1) 土 器

グスク系土器が第 3 テラスの最下部で 10 数片検出されたのみで、土器はほとんど使

用しなかったと考えられる。

(2) 中国陶磁器

青磁、白磁、青花などの磁器と陶器類が多く検出された。

青磁は蓮弁文鉢、砧青磁鉢、天龍寺青磁の盤・酒海壺・鉢・皿などが検出されている。遺物の量としては碗、盤などが多いが、ほかに、小盃、香炉、瓶などの青磁もみられる。これらの青磁は14世紀がほとんどのようである。

白磁は口禿の皿、鉢、面取皿などが検出されている。青花は元青花の壺・瓶・鉢・盤などのほかに、明代の碗・皿・小壺などが検出されている。ほかに黒釉茶入、天目茶碗、翡翠釉鉄絵壺、緑釉劃花花唐草文壺、五彩、三彩などが検出された。このように器種が多く、良質のものが多くのが大きな特徴のようである。

陶器はほとんどいわゆる「ルソン南蛮」と呼ばれているもので、広東省仏山の危石窯の陶器（三上次男氏の御教示）のようである。

(3) 高麗青磁

白黒象嵌の高麗青磁鉢が8片検出された。

(4) タイの鉄絵袋物

タイのスワンカロック窯（矢部良明氏の御教示）の鉄絵袋物（合子か壺）が1個検出された。

(5) 鉄 器

刀の破片、短刀、鍔などの武具が検出された。鍔は3・4種類のものがみられる。ほかに鉄釘が多く（約200本）検出された。また、鋏が1個検出されたがこれまでに出土例がなく、今後の研究を待ちたい。

(6) 銅製品

武具の付属品として、刀の切羽、甲と冑を結ぶ絆3個が検出されたがこれらは、いずれも金メッキが塗られている。

(7) 花 押

約2.8 mm×2.8 mm（1辺は2.9 mm）のほぼ正方形、厚さ約2 mmで、つまみのついた銅製の花押である。この種の花押の出土例がなく明らかではない。

(8) 古 銭

古銭は23種で約50枚検出。ほかに判読できないのが数個、無文銭が約30枚検出された。なお、洪武通宝だけで7種類確認できた。

第2テラス出土古銭	第3テラス出土古銭
乾元重宝（758 唐）1枚	貨泉（4 新）1枚
乾徳元宝（919五代十国）1 "	祥符元宝（1009 北宋）1 "
元豊通宝（1078 北宋）1 "	天聖元宝（1023 "）1 "
崇寧重宝（1102 "）2 "	皇宋通宝（1039 "）1 "
崇寧通宝（1102 "）1 "	熙寧重宝（1068 "）2 "
正隆元宝（1157 南宋）1 "	元豊通宝（1078 "）1 "
端平通宝（1234 "）1 "	崇寧重宝（1102 "）3 "
洪武通宝（1368 明）1 "	崇寧通宝（1102 "）3 "
	政和通宝（1111 "）1 "
	建炎通宝（1127 "）1 "
	嘉熙重宝（1239 南宋）1 "
	至大通宝（1309 元）1 "
	洪武通宝（1368 明）13 "
	永樂通宝（1411 "）1 "

(9) 勾玉、管玉、ガラス小玉類

勾玉2個、管玉1個、ガラス小玉3個が検出された。

(10) 遊 具

陶磁器の破片を打欠してまるく作ったおはじきのようなものが多く検出された。これは草戸千軒遺跡でも検出されているようで、子供たちの遊び道具ではないかと考えられる。また、青磁碗の底部を打欠してまるくしたのもかなり検出されており、これも遊具ではなかろうか。

(11) 砥 石

鉄器がかなり入っている関係で砥石が多く検出された。これは現代の砥石とほとんど変らないもので、石質も同じもののようである。これらの砥石の多くは柱穴中から検出

された。

(12) 石製品

小形の石製品が10個ぐらい検出されたが、用途は不明である。護符と言われているようなものもみられる。穴のあいているものや穴のないものなど形もいろいろみられる。

(13) 炭化米、炭化麦

炭化麦が多く検出された。炭化米は炭化麦に比して僅かの出土である。穀類では麦が圧倒的に多いことから、麦が主であったと考えられる。

(14) 獣骨、魚骨

牛骨と考えられる大形の獣骨が非常に多く検出された。ほかにイノシシの骨が多い。魚骨はブダイ、ハリセンボンなどがみられるが、ほとんど同定待ちである。

(15) 貝殻

シャコガイ、チョウセンサザエ、アラスジケマンガイなどがみられるが、出土量は非常に少ない。

ま と め

以上の発掘成果により、今帰仁城跡の一部がかなり解明された。陶磁器や古銭などの出土遺物からして14世紀後半から15世紀初頭までのものが圧倒的に多く、その頃に志慶真門に宅地造成が行なわれ、「武士」の屋敷が造られたと考えられる。ただ16世紀の遺物も若干みられることから、その頃まで住んでいたかについては、今後の成果を待ちたい。

これらの「武士」は7坪ほどの掘立柱の家に住んでいたようであるが、高級な陶磁器を使い、牛、イノシシ、麦、米など上質な食糧を食べていたようで、かなり「上級の武士」であったと考えられる。また武具のほかに、おはじき、鍬、香炉、勾玉、管玉、ガラス玉などの出土遺物から女、子供が存在が考えられ、家族単位の生活が感じられる。

(県教育庁文化課	金 武 正 紀)
(今帰仁村教育委員会	松 田 朝 雄)
(沖縄大学 O B	宮 里 末 廣)



PL. 1 今婦仁城跡全景



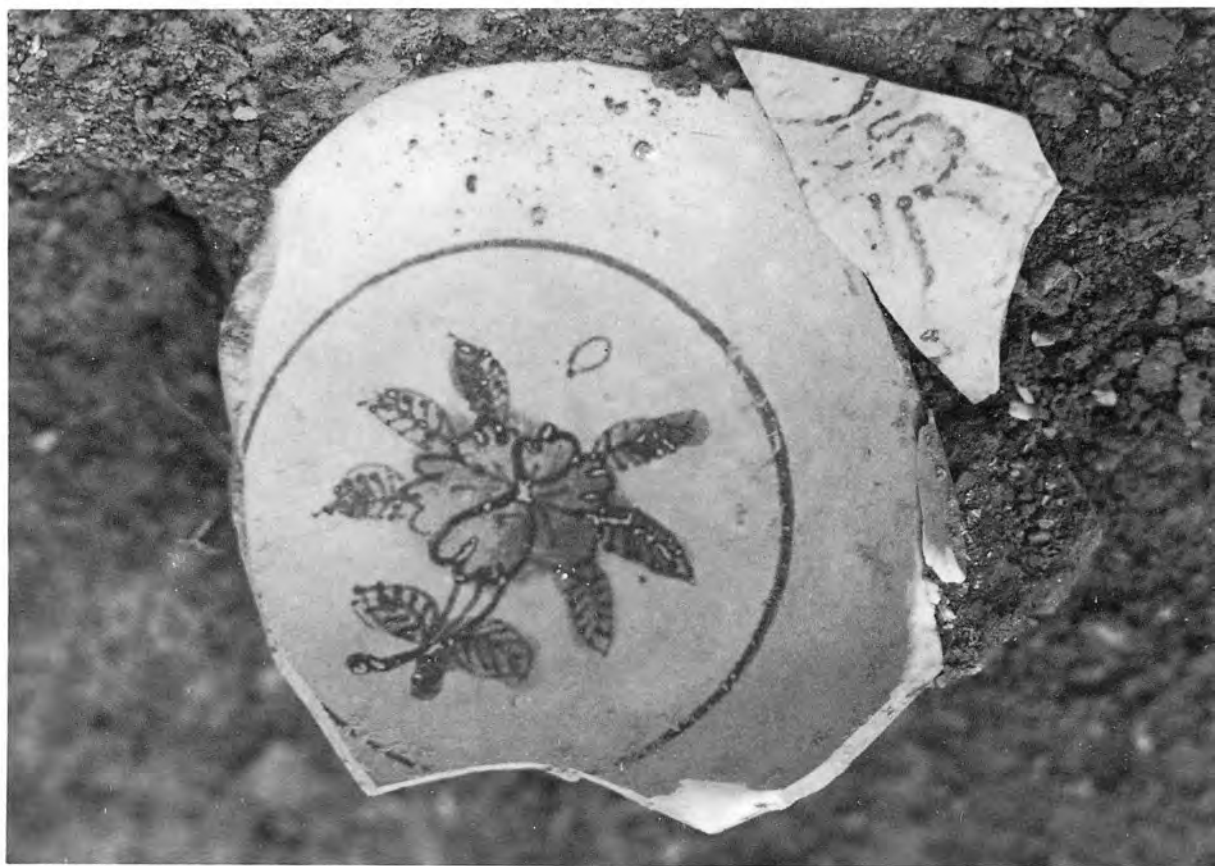
PL. 2 上-旧道の石畳

下-志慶真門発掘開始



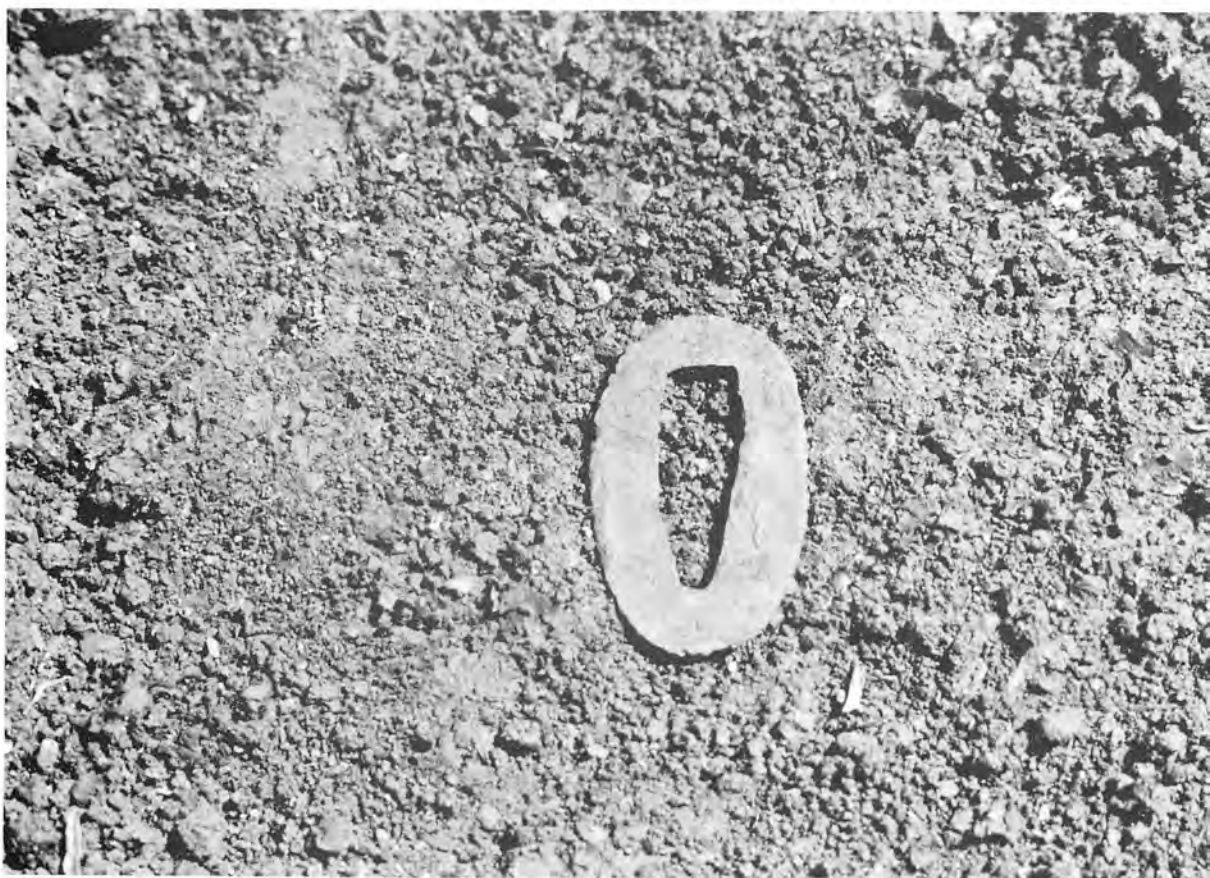
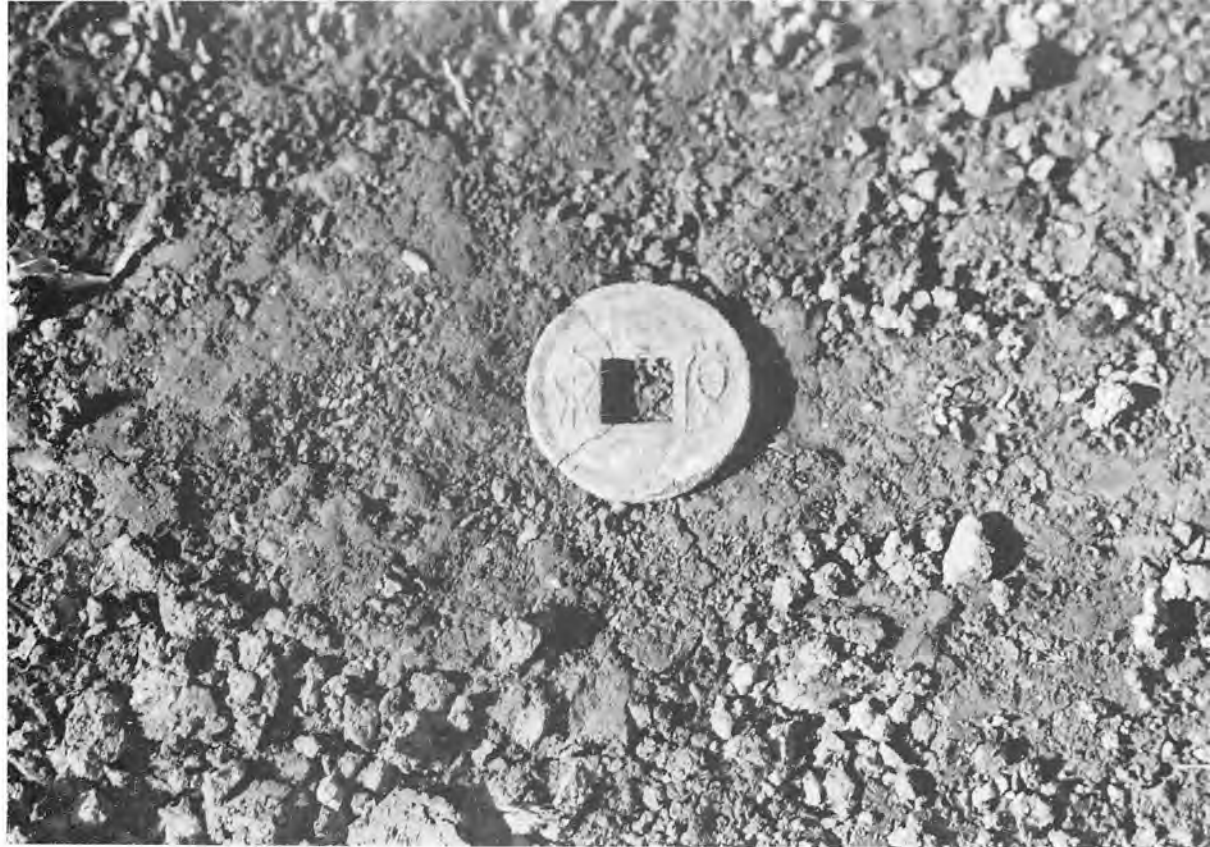
PL. 3 上-志慶真門第2テラスと建物跡と第3テラス発掘

下-第2, 3テラス遺構



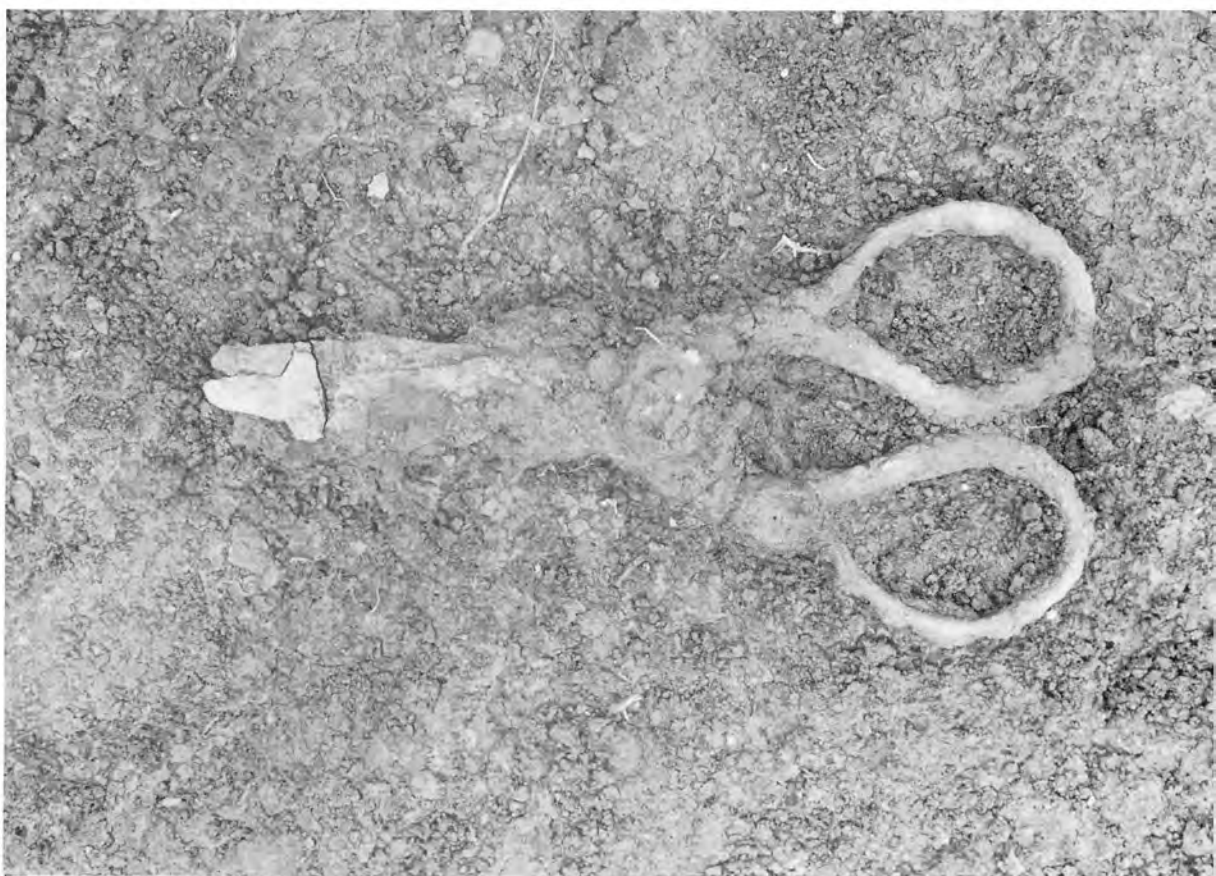
PL. 4 上—翡翠釉鉄絵壺

下—青花花唐草文碗



PL. 5 上—貨 泉

下—切 羽



PL. 6 上-花押 (銅製)

下-鉄 鋏

今帰仁村文化財調査報告書第 5 集

史跡 今 帰 仁 城 跡

第 1 次発掘調査概報

1981 年 3 月 13 日 印刷

1981 年 3 月 14 日 発行

編集・発行 今 帰 仁 村 教 育 委 員 会

沖縄県今帰仁村字仲宗根 232

TEL (098056)-2647・2645

印 刷 文 進 印 刷 株 式 会 社

那覇市字上間 567

TEL (0988) 33-3636
